

# 健康への疑問

— 体育, スポーツ, 健康の関係の考察 —

樋口 聡  
(1985年10月1日受理)

Question about Health  
— Reflection of the relation between physical education, sport and health —

Satoshi Higuchi

They say a health boom is on. In the boom, it is also said that health is very important for happiness, or health is the ultimate object of life, and physical education and sport make a contribution to healthy life in the modern society. The practical significance of that idea seems to be understood, but we can also offer some questions to it from the philosophical point of view.

In short, the questions are: a. What is health? How should we grasp the concept of health? b. Is health really the ultimate object of life? c. Is there actually a close connection between physical education, sport and health?

To answer the above questions, the following three kinds of relation were reflected in this paper. That is, (1) the relation between physical education and sport, (2) the relation between physical education and health, (3) the relation between sport and health.

In this paper, as the question c corresponds to the relation (2) and (3), and the relation (2) can be briefly understood by the consideration of the relation (1) (physical education in functional meaning and sport in substantial meaning), main problems are the question a, b and the relation (3).

As conclusions:

About the question a: The definition that health is a state of complete physical, mental and social well-being [WHO] is just relative, institutional and ideal / dreamy, and it doesn't have any practical contents.

About the question b: Health is only *mirage* in one meaning, not substantial value. When health is limited to the cure of physical or mental diseases, it has practical importance. In its limitation, health is not the ultimate object of life, but only the elementary condition of life.

About the relation (3): Health is not included in the intrinsic structure of sport. Sport has only possibility to provide the means of physical movement for health.

## 1 健康をめぐる風景

いま、健康ブームだという。健康食品、健康器具、健康法、そしてカルチャーセンターなどの健康講座、まさにいまや、健康は立派な商品である。健康が商品になりうるということは、その需要があるということである。その実態は、健康に対する人々の意識調査の結果をみて、ある程度納得ができそうである。生活の

諸側面のうちながたいせつかをたずねると、半数をはるかに越える、あるいは調査によっては九割近い人々が、「健康」と答えるという<sup>1)</sup>

ブームとは急激な流行のことであるが、この健康ブームとよばれる現象は、流行語や服装のファッションとは少し違った背景をもっているように思われる。健康を害すれば、病気となって苦しい思いをしなければならず、仕事や学業にも支障をきたす。医療のための経

済的負担や周囲の人々の精神的負担もたいへんなものであるし、最悪の場合には生命の危険をまねき、死という大きな不幸へと至ってしまう。そのような事態になればたいへんなことであるから、健康は求められなければならないし、なによりもたいせつなものである——これは人々のいつわらざる実感であろう。このように、われわれの身に直接ふりかかってくる病気や生命の危険に関わっているゆえに、健康ブームは、単なるマスコミや企業がつくり出した流行現象ではなく、もっと深い意味や価値をもっているかもしれない。

しかし、少しふりかえてみると、病気などで健康を害するということは、健康ブームといわれる最近に始まったことではなく、おそらく人類の誕生とともにあったことである。それでは、なぜ、いま、とくに健康ブームなのだろうか。それは、おそらく、現在求められる健康や克服されるべき病気が、現代社会と密接に関連するものであるからであろう。現代の高度に技術化された社会が、健康を害する原因を生み出していることが、しばしばいわれる。精神的なストレス、運動不足、人工食品、公害、等々を指摘することができるであろう。これらに対して、個人のレベルで自覚的に対処できる部分がかなりあり、例えば、精神的ストレスや運動不足には適度な運動をすること、人工食品には自然食品とよばれるものを選択すること、などが、それらの自覚を促すことも含めて、身近な健康のための対応のしかたとしての「健康づくり」運動となつて、健康ブームとよばれるような現象がたちづくられていると考えられる。

医学の研究の進展により、平均寿命がのびたり、これまで不治の病といわれたものが克服されたりして、われわれをとりまく健康のための状況は改善の道を迎っているかにみえるが、しかし、上でみた健康ブームとよばれるような現象に対して、われわれは、やはり、なにか奇妙な、あるいは滑稽な風景を思い描かざるをえない。人間がつくりあげた科学技術や文化によって、同時に、これまでにない人間の健康阻害要因が生み出され、それに対して、単純な「自然に帰れ」式の方法ではどうしようもないところにまで人間は来てしまっているのだ、おのれの首をしめたその手で、それを乗り越える方法を考え出さなければならない、というような風景である。健康を維持するために、部屋のなかで健康器具とよばれる器械の上でかけあしをする、というような光景はやはり異常であろう。

さて、健康については、これまで、医学をはじめいろいろな観点からさまざまなことが論じられているが、当面の、われわれが本稿で描写しようとする健康をめぐる風景は、次の三つのアングルからとらえられ

る。

一つは、「健康」ということが、ちょっと見るだけでは、いかにも明瞭に誰にも同じような印象を与えるのであるが、少し角度を変えて見る位置をいろいろに変えてみると、はっきりととらえられなくなったりあるいは消えてなくなったりしてしまう、ということである。一般に健康といわれるときは、上でみた健康ブームにおいてもおおよそそうであるように、病気がない頑健な身体についての健康である。当然、すぐに思い至るように、身体だけでなく、こころの問題に関しても健康ということがいわれる。つまり、ここで問われるのは、健康とはなにか、というようなことであり、定義の問題として、これまでも健康について語られる際必ずといっていいほどとりあげられているが、われわれもまずその点に着目したい。

二つめは、健康は非常に重要なものであると誰もが考えていることである。上でみた健康ブームの基盤にもあったように、なんといっても、健康を失ったらたいへんなことになるという人々の日常の実感がある。それに、主に医学の研究者によって、健康は人間にとって一番たいせつなものであり人生の目的や幸福は健康にある、というようなことがいわれている。このことが第二の着眼点である。

三つめは、運動ということを中心にして、医学とともに体育学が健康の問題に関わっており、体育とかスポーツが健康づくりの重要な役割を担っているということである。体育学の研究者は、増大する医療費の問題を解決する極めて有効な方法が、体育やスポーツにあり、積極的な健康増進の手段として、現代社会における体育やスポーツの重要な意義はまさにそこにある、というようなことを述べる。

このようにして、現代の健康をめぐる風景は、ある意味で奇妙なものではあるのだが、くなんとなき了解されて健康ということがいわれる——健康はなにもまして重要である——健康と体育やスポーツが密接な関係にある（それゆえに体育やスポーツは重要である）というような関連を、一つの図式としてそこに読みとることができるであろう。そして、われわれとしては、このような図式のもとに、しばしばいわれるように、重要な健康のために適切な体育やスポーツのより一層の普及や指導につとめ、健康をめぐる風景をより明快に描くべきではないのか。体育学は健康科学として、現代社会におけるその任務を立派に遂行すべきではないのか。

しかし、先に「奇妙、滑稽、異常」な風景ということで若干暗示されたように、上の一見健全な図式には、いろいろな疑問が提示される。それはなにか。

## 2 疑問の提示

健康をめぐる風景は、描き手の視点や技量によって、さまざまに描かれる可能性がある。前節で描かれた、われわれの健康をめぐる風景は、とくに三つのアングルが強調されたわけであるが、そのアングルがそのまま疑問の対象となる。

第一の観点は、すでに疑問の提示となっていた。すなわち、健康とはなにかということがあまりはっきりしていない、ということである。健康の定義をめぐる問題を、われわれはどう考えたらいいか。このことは、次の第二、第三の疑問とも関連していることはいうまでもない。

第二の観点は、健康は、非常に重要な、人間にとって究極的な価値である、ということについてである。先にもとらえたように、健康を失ったらたいへんなことになるという切実な実感があるゆえに、このことはほとんど疑う余地のないことのように思われる。そうだとすると、次の第三の観点とも関連して、現存のほとんどのスポーツは、究極的な価値としての参加者の健康を、なんらかのかたちで奪う可能性をつねにもっているから、そもそもスポーツというようなものは反価値的なものだとということになる。健康が究極的なものならば、それを実現するようなスポーツこそが人間にとって最も重要なスポーツだということになるが、現実のスポーツは、必ずしも健康を目指すようにはつくられていない。これは、なぜなのか。スポーツに携わる人々が、上のような健康の究極性ということを理解していないからだろうか。また、体育とよばれる教育においても、もちろん健康への配慮はあるが、やはりスポーツが中心的な教材として使われ、主にスポーツが教えられる。健康が究極的な価値で、すべてがそれに収斂するようには、カリキュラムはつくられていない。これは、なぜなのか。体育関係者が健康について根本的に無知だからだろうか。

第三の観点は、体育やスポーツと健康のむすびつきの問題である。「正しい理論を基礎としてこそ運動やスポーツは健全な発展が可能となり、体力、健康の向上を辿じて人類文化に大きな貢献をすることができるのである<sup>21)</sup>」というような運動生理学者の論述を読むと、そこには、スポーツ — 運動 — 体力 — 健康、というつながりがあり、それに体育も加えて、一連の関連図式ができあがるであろう。スポーツ医学というような領域が、どのような問題を取りあげ、スポーツに関してどのような寄与をしようとしているのかは理解できるが、ここで問題にしたいのは、体育やスポーツといったことがらが、ほんとうに健康と直接的にむ

すびつくなのか、関連があるとしてもどのような関連のしかたをしているのか、ということである。その場合、まず、体育とスポーツ、あるいは運動も関連させて、それらのことばの区別が必要であろう。これらは、あまり反省されずに、ほとんど同義に使われることが多いが、ことばの整理が、当面の問題の解決に重要な意味をもつ可能性は大きい<sup>3)</sup>。

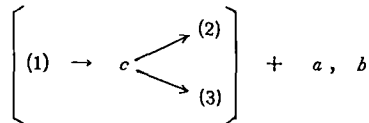
「体育は、そもそも健康の維持増進に役立つものなのに、スポーツでけがをしったりからだをこわしたりしているのはおかしい。相撲のようなものは、極端な、いわば病的な肥満をつくりあげているようなものだ。体育に携わる人は、もっと健康のことを考えてスポーツにとりくむべきではないか」などということ、医学に携わる人から聞くことがあるが、このような批評は、ほんとうに正しいのだろうか。発言の内容が厳密でないということもあるが、もし、スポーツが健康を直接的に目指すものならば、健康を害するスポーツやスポーツへのとりくみかたは、存在意義を失い、廃止されなければならない。そうすると、現存のほとんどすべてのスポーツが改良の手を加えられなければならないことになるであろう。ほんとうにそうあるべきなのか。

以上のように提示されたいくつかの疑問は、健康ブームの、健康づくりの光景に対してもたれた、奇妙な、滑稽ともいえる感情をその基調としている。健康づくりでつくられる健康というようなものは、人間がそもそももっていたもので、人間は、自分がかつてもっていたものを自分で捨ててしまい、その捨てたものを一生懸命にさがしまわる、というような愚かなことをやっているのではないのか。あるいは、人生の究極の目的としての健康などというのは、まさに絵に描かれた風景にすぎないのではないのか。さまざまな疑問が健康と交錯する。

とまれ、われわれがいま考察の対象とする問題は、上の三つのアングルから提示された疑問に限定されなければならない。このような、健康というような基本的なことがらに対して疑問を投げかけることについて、「それは、あなたが若いし、いままで大きな病気をしたことがないからだ」というような愚考を巡らす人がいるが、これまでの論述から、本稿での健康への疑問が、健康の重要性を単純に無視したりするものでは少しもないことは、明らかであろう。本稿での健康への疑問の提示は、健康を人間存在のありかたとの関わりの中かでよりよく理解し、体育やスポーツとの関係の中かで健康の正当な位置を見出そうとする試みにはかならない。

### 3 考察の構図

前節で提示された疑問をめぐる本稿の考察は、基本的には、体育、スポーツ、健康の関係の考察である。三者間のそれぞれの関係であるから、組み合わせとして、(1)体育とスポーツの関係、(2)体育と健康の関係、(3)スポーツと健康の関係、が成立する。前節の疑問は、要約すると、*a*・健康とはなにか(定義の問題)、*b*・健康は人間の究極的な価値なのか、*c*・体育やスポーツは直接的に健康とむすびつのか、ということであったが、上記の三関係と対応させてみると、*c*の疑問についての考察が、関係の(2)と(3)に対応することになる。(2)と(3)が分けられるということは、そこに体育とスポーツの区別があるからにはほかならない。それは、関係の(1)により導かれる。以上の、関係の区別の整理をふまえて、さらに考察は、疑問の*a*、*b*に関係する、健康の価値の問題を含む。それは、健康ということをも媒介して、体育やスポーツの価値の問題へと接続している。この考察の構図は、次のようになるであろう。



後に示されるように、*a*、*b*、*c*の疑問は、スポーツに関する問題に源泉がある。したがって、当面の、本稿の考察は、構図の作成としての本節において関係の(1)、(2)の問題にふれ、次節以下において、関係の(3)の問題を疑問の*c*に対応させ、*a*、*b*、*c*の順序で考察を進める。

(1)体育とスポーツの関係。この関係についてはいろいろ論じられているが、あいまいに、ほとんど同義かのように使われているのが現状である。しかし、両者の間には明瞭な区別をたてなければならない。この区別には、これまでの論の検討も含めて、概念をめぐる周到な考察の展開が必要とされるが、本稿では考察の目的にそいながら、体育を教育としての关系的、機能的な意味に、スポーツをバレーボール、サッカー、テニス等の、ルールによって構成された一定の行為のパターンをもった実質的、実体的な意味においてとらえるという、区別のための視点に立つにとどまる<sup>4)</sup>

体育は、教育として、教える側、学習する側、教材等の変数の関係において成立する一つの機能であり、ある大きな前提、目標の上になされる意図的の行為である。それに対してスポーツは、教育とは本質的に関わりなくつくり出された、遊戯性、組織性、競争性、身体性を特性とする、文化的産物である。具体的には、

バレーボール、サッカー等の、普通にスポーツとよばれるものを思い浮かべればよいのであるが、ルールによって、競争の要素を含んだ、独自の意味のまとまり、意味連関をもたされたものである<sup>5)</sup>。スポーツは、それへの参加者の態度や意識とは関係なしに、その意味で実体的に存在するゆえに、いろいろな関わりかたがありうる<sup>6)</sup>。レクリエーションとしてスポーツに関わることも可能であるし、プロとして生活の質を得る対象として関わることも可能である。いいか悪いかは別にして、政治的な意図で関わることもありうる。そして、また、教育の手段として関わることもありうるわけで、それが体育という現象となって現れる、と考えられるのである。

逆に、体育の側から考えれば、例えば「文化としてのスポーツを若い世代に教える」とか、あるいはほかのなんらかの前提としての目標を満たす機能として、スポーツを教材化して、その関係のなかにとりこむ、ということになるのである。

つまり、体育とスポーツは、体育がスポーツを中心的な教材として用いるがゆえに、なにか同一のもののように思われがちであるが、本質的には全く異なる次元に成立するものなのである。

(2)体育と健康の関係。教育としての体育は、わが国においては、学校制度のなかでは「保健体育」という教科として実現される。高等学校の学習指導要領によれば、保健体育の目標は、「健康や体力についての理解と運動の合理的な実践を通して、健康の増進と体力の向上を図り、心身の調和的発達を促すとともに、明るく豊かで活力のある生活を営む態度を育てる<sup>7)</sup>」とである。そうすると、少なくともこの目標のもとにとらえられる体育においては、健康がその目標のなかに含まれているのであるから、その目標を満たす機能として、体育は健康を阻害することはありえない。現実としてそれがうまくいっているかどうかは別として、体育と健康の関係は目標における必然性をもっている。

このように考えてみると、「体育やスポーツと健康の関係」というように、体育とスポーツを並列にとらえることが不適切であることが明らかであろう。体育は、目標が変わることによってその実態も当然変わるのであるが、健康がなんらかのかたちで関係させられるであろうと思われる。一方、スポーツは、例えばバレーボールであれば、例の、コートにネットがはられた場所でのボールのやりとりというゲームを意味しているにすぎず、直接的に健康が目標としてくみこまれているわけではない。したがって、健康との関係という場合、より疑われる問題性をはらむのは、やはりスポーツなのである。

以上の、(1)と(2)についての若干の考察によって、問題がさらにしぼられてきた。まず、これまで暗黙の了解のように使われてきた「健康」とはなんであるのか、あるいは「健康」という概念についてどう考えればいいのか、それが問われなければならない。

#### 4 健康という概念の検討

健康の定義といった場合、まず思い浮かべられるのはWHOの定義であり、健康についてなにか語られるときそれが必ずといっていいほどひきあいに出される、と述べることもすでに陳腐かもしれない。例の健康ブームに応じてか、あるいはそれを煽るようにしてか、健康とはなにかについては、医学や体育学に携わる人人によってもはや十分ともいえるほど論じられている、かのようである。それらと並んで、健康とはなにかを反復することは、本稿の考察のとるべき立場ではない。先に提示された疑問に対応できるような洞察を与える方向で、健康の概念が把握されねばならない。したがって、「健康の概念の検討の検討」とでもいうべきメタ的立場に立つことが、当面の方法的視座である。

古くから健康の定義については語られていたが、それらは学者により時代により、また国によってかなり違っており、どうしても権威ある健康の定義が必要となり、そこでつくりだされたのが1946年のWHOの定義だという<sup>8)</sup>。そして、目下のところWHOの定義に勝るものはみあたらないという<sup>9)</sup>。WHOの定義にとってかわられる「従来の健康」の定義といわれているものが、すべて1946年以降に発表されたものである<sup>10)</sup>という、この記述だけではなんとも理解しがたい点もあって、上で述べられたように、WHOの定義が、権威のある、目下のところ最高のものなのかどうかは疑わしいが、WHOの定義が、健康を論じる際のあたかも権威づけられたすぐれた統一見解かのような意味づけをされている、ということに、まず着目しておく。WHOの定義を安易に利用することに批判的な論者ももちろんいる。

WHOの定義の柱は、周知のように、健康とは、単に病気でないとか、虚弱でないということではなくて、身体的、精神的、社会的に完全に良好な状態である、ということである。このことから、身体的健康、精神的健康、社会的健康、というようなとらえかたが生まれる。

このWHOの定義は、健康を単に身体の問題とするのではなく、精神的な面はもちろんのこと社会的な面にまで広げているとか、単に病気でないか否かというだけでなくもっと積極的なものを意味している、と

というような点において評価されたりしている<sup>11)</sup>が、具体的に健康とはなんなのかは一向に明らかに示してはいない。それは、「完全に良好な状態」という抽象的な表現に帰着する。このことを実感しながら、田中は、身体的、精神的、社会的健康を次のようにとらえる。

身体的健康については、「健康というものに絶対的な水準があるのではなく、常に年齢相応の水準があり、社会生活がそれを規制する重要な鍵となっている・・・身体面の外形と機能が、ある水準を上まわっているとき、人びとはこれを健康と呼んでいる」。精神的健康については、「精神的には、どのような価値体系であれ、自らが多くの体系から選択した価値体系をもち理性的な判断のもとに行為を統制し、豊かな情感のなかで自己を評価しうる条件さえ満たされていれば、それがその個人にとって健康なのである」。そして、社会的健康については、社会における自己の役割をみたくして社会関係を保ち、社会の約束にしたがって社会に適応していくことができること、というようなことが述べられている。<sup>12)</sup>

以上のような、主に医学の研究者によって展開される健康論を概観することによって気づかれることは、第一に、健康ということが、数値のようなもので示される一定の水準によってはっきりと客観的に規定されるものではない、ということである。精神的、社会的な面についてはいうまでもなく、身体的な面についても、健康指標が考え出されて健康の判定に役立てられたりしているが、上で田中が述べるような意味での相対性があるし、また、次にとらえる健康の全体性を考えたとき、健康の水準はあくまで相対的であるというべきである。

第二に指摘されるのは、健康の全体性ということである。健康とは単に病気でないということではない、ということは、より積極的な行動体力というようなことが意味されるほかに、例えば一つの臓器の機能障害を回復させることがそのまま健康ということになるのではない、というようなことが含意されているように思われる。健康は環境と人間の主体条件の平衡において成立するという考えや、健康の多面性(身体的、精神的、社会的)といったことから、<sup>13)</sup>健康の全体性が読みとれる。このように統合的な概念として健康がとらえられることによって、そして、さらに、基本的人権として健康がとらえられる<sup>14)</sup>ことによって、最高に充実した健康の状態が、人生にとっての最高の価値であるとされるに至るのである。<sup>15)</sup>

さて、われわれは、以上のような医学的見地からの一応の論の展開に対して、少し違った角度から考察の光をあてなおして、われわれの抱懐する疑問との距離

を展望してみなければならない。

WHOという機関によって健康の定義が権威づけられるかのように、現代社会でわれわれをとりまく健康は、主に医学という制度を通しての、制度的なものである。重要性が説かれる健康は、絶対的な基準を有さない相対的なものであるが、その相対性は人間の主体条件と環境の平衡によって保たれ、統計的な平均値に限りなく近づくことを基本的には意味している。身体的にも精神的にも社会的にも、異常のないほどよい適応が、健康と判断されるためには必要である。なにが異常であり、なにが正常なのか、その判断にはまさに権威が必要なのであり、健康は、制度によって作り出されなければならない。それは、健康のために、なんといっても克服されなければならない「病気」についてもいえる。柄谷が指摘するように、「病気は、それが分類され区別されるかぎり、客観的に存在する。たとえば、医者がそう命名するかぎりわれわれは病気なのだ。当人が病気を意識しない場合でも、“客観的には”病気なのであり、当人が苦しんでいても病気でないとされることもある。いかえると、病気は諸個人にあらわれるのとはべつに、ある分類表、記号論的な体系によって存在する。それは個々の病人の意識をはなれたところにある社会的な制度である<sup>16)</sup>」。富永は、「健康、それは人間における集団的秩序の身体的または精神的な表現形態である<sup>17)</sup>」と述べ、制度的な基盤から生み出される健康に、秩序が無秩序を、同質性が異質性を圧倒させ、服従させてゆく一種の権力過程をみている。

現代社会における病気は、医療制度によって命名され、作り出されるが、同様に健康も、社会的な制度によって作り出されたものなのである。「健康教育は医療とは違う。専門的な健康教育のための全国的な組織をつくり、厳格な資格制度を設けて、専門的な活動を推進していかなければならない<sup>18)</sup>」というようなことを述べる人がいるが、そもそもの健康の制度性を理解しないかぎり、健康教育は健康ブームをつくり出すことはあっても、人類にとっての恩景(boon)などにはとうていなりえないであろう。

田中は、健康は基本的人権だという。それは、健康が与えられるものではなく、自らちとるものであること、そして、そのための行動を支えるべき各種の条件が国家的責任において整備されるべきものであることを意味している<sup>19)</sup>という。田中の主張でとくに読みとれるのは、健康がなにかの、例えば労働力とか国家的政策(戦争のための兵力等)とかの手段となつてはならない、ということである。生産力を向上させるために人々の健康が重要なのではなく、生きる権利と

して健康そのもの、健康それ自体が重要なのであり、それが本当の健康であり至上の価値である、というのである<sup>20)</sup>また、宮田は、ほとんどとりあげるに値しない不合理な論の展開で、「人間は日々、健康を目的として、生活を行い、さらにより健康な生活を目標にし、そして最上の健康を人生の究極の目的として生活すべきであると思うのである<sup>21)</sup>」などと述べている。ここで彼らによって語られる、「本当の健康」とか「健康そのもの」とか「最上の健康」とは、いったいなんであろうか。これは、「完全に良好な状態」というWHOの定義と同様、観念的なものであるにすぎない。

「朝が来ればはっきりと目が覚め、頭がすっきりしている。そして活動しようという意欲をもって未練なく寢床を離れることができる。空腹感が起きて食事がおいしく食べられる。排泄も快く行われる。力いっぱい仕事ができ、人との折り合いにも欠けるところがない。したがって周囲がひどく気になることもない。働いた後には仕事をしおえたという充実感があり、余暇には肉体・精神の解放が味わえる。夜はぐっすり眠れる。休日にはスポーツなり趣味なりを元気いっぱい楽しむことができる。無論からだのどこに異常を感じるころはなく、生きていくことに不安がない<sup>22)</sup>」

このような健康の状態の描写は、日常的な感覚でもっともらしく思われるが、こんなふうにして毎日を過ごし人生を生きていく人など実際にいるようには思われない。それは、たえず健康であり続けることが不可能だという意味ではなくて、人間がこんなふう単純に健康な生活をよしとして、それを躊躇なく受け入れて生きていくなどは思われないということである。人間はそれほど単純ではない。人間がそれほど単純ならば、例えば、死に至る存在として、死への不安を根本的な気分としてもっているという人間についての、哲学者ハイデガーの思索はどうして生まれえたであろうか。上の素朴で無思慮な健康の記述が、少し人間についての思いをめぐらせれば、そらぞらしいものとしか感じられないのは、それが観念的なものであるからにはかならない。健康は、制度として作り出されたものであったが、そこに生み出されたものは、健康の観念性である。身体的にも精神的にも社会的にも完全に良好な状態などという健康は、まさに社会的な制度によって観念的に描かれた風景にすぎない。そこには生きた人間はみあたらない。

健康という概念の相対性、全体性、それゆえの制度性、観念性が指摘され、われわれは、健康をそのようなものとしてつきはなし、いま、その価値を疑う地点

に立っている。健康の価値はどういうことになるのだろうか。

## 5 価値としての健康

健康の観念性まで考察が進めば、健康は幻想にすぎないというルネ・デュボスの論がみえてくる。「過去、未来を通じての麗しのユートピアはすべて、人類が安定した環境で静かに暮らしているという条件のときだけ、たえざる健康と幸福の座であるにすぎないのだ。そして、現実の世界では、場所が変われば、人もまた変わるのである。おまけにたえず変わっていく遠く離れた目標をめがけて、自ら進んで努力するため、他の生物よりも、ずっと予想しがたい運命をたどる。この理由から、どんなに社会的・医学的計画を注意深く立てたところで、幸福と健康とは、絶対的な永続性のある価値をもちえないわけである<sup>23)</sup>」。ユートピアであり幻想である健康が、単一の内容をもち、重要だ、重要だといって目指されるべき価値となりえないのは当然であろう。ユートピアとしての健康など、現実的にこの世には存在しないし、当然存在しえない。それは、誰もが楽しくほがらかに、老いることなく永遠の命をもって生きていく、というような楽園を夢みることと変わらない。しかしながら、現実的には実現不可能でも、理想として目標として健康を考えることができるのではないか。しかし、そうであるならば、人間の生命という領域に、かなり現実的な意味において主要な位置を見出す医学が、健康について語ることはほとんど意味をなさないことになる。医学は、素朴なユートピアを夢みることによって、人間の全体像に、そして究極的な価値に関わっているのである、などという自己賛歌は少しも成立しない。夢みられたユートピアとしての健康は、もはや「健康」とよばなくてもよい。「幸福」といってもいっこうにかまわれないわけで、そのとき、人生の至上の価値といわれた「健康」は、消えてなくなってしまう。

健康が幻想であるということは、それが非現実的な夢物語にすぎない、というようなことだけを意味するのではない。その幻想は、健康はよろしいものだ、人間は健康であらねばならない、健康を享受しえていない人々や階層も健康な状態に入るべきだというような使命感<sup>24)</sup>として、極めて現実的な意味をもちうるのである。ここでまたデュボスの述べるところに耳を傾けてみよう。「人間が健康と幸福を切望するのは当然である。しかしながら、いく人か、そしてたぶん全員にとって、これらの言葉は、通常の生物的概念をこえた意味をもっている。人間がいちばん望む種類の健康は、

必ずしも身体的活力と健康感にあふれた状態ではないし、長寿をあたえるものでもない。じっさい、各個人が自分のためにつくった目標に到達するのにいちばん適した状態である。通常、これらの目標は生物的必要と関係をもたないばかりか、時には、生物的有用性に相反することもある。健康と幸福の追及が、生物的よりもむしろ社会的な渴望によって導かれることが、かなりある。渴望というものは、個体や種の生存にとって重要性をもたないから、人間だけに特有で、他の生物には意味がない<sup>25)</sup>」。

人間だけに特有で他の生物には意味がない、社会的な渴望によって導かれた健康、それは、まさに、生物的な欲求 (besoin) ではなく、過剰としての欲望 (désir) によってもたらされた、共同幻想としての「文化」であろう<sup>26)</sup>。身体的、精神的、社会的に完全に良好な状態としての健康などというものは、生物としての人間の本能的なレベルでの欲求ではなく、社会的に制度的にそれは望ましいものなのだ、重要なものなのだ、というふうに意味づけされた、そういう意味での「幻想」にはかならないのである。健康の価値も、幻想としての、幻想における価値でしかありえない。もっとも、文化そのものが幻想なのであるから、健康の価値が重要なものなのかどうかは、それ自体では明らかではない。むしろたいせつなのは、それが幻想であることに気づいているかどうかということであろう。素朴な鈍重な感覚での健康礼賛は、「病気を純粋に病気として対象化する近代医学の知的制度が疑われないかぎり、近代医学が発展すれば、人々は病気から解放されるだろうというようなことになってしまい、そのような発想は、病気を生じさせるものは悪でありその悪を除去しようという神学の世俗的形態にすぎない」<sup>27)</sup>あるいは、「『生』とは、局部的で過渡的な健康の乱れに接して全体や個体のあるべき健康を夢想する抽象的な問題であってはならない、その装われた善意こそが、『制度』の維持に貢献する悪しき頹廢の実態だからである<sup>28)</sup>」、というような批判を生むしかないであろう。本稿でとりあげられた何人かの医学や体育学の研究者が、健康の幻想性にどれほど自覚的であるか論ってもしかたないが、田中が、他の文化体系（例えばアフリカ中部の黒人種族）の人間に対して、「われわれの社会の価値観をそのまま押しつけることが妥当なのか（それ以前に可能なのか）を考えると、筆者は大きなためらいを感じる。たとえば人権だ、充実した生活だ、などというのは、われわれだけの話で、彼らにかかわりのあることとは考えられない。大自然のなかを、彼らなりに楽しむ生活と健康があってもよいような気がするのである<sup>29)</sup>」と述べるのは、正当な実感である。

このようにして、健康の価値は、幻想のなかで意味づけされたものにすぎず、なんら実質的な基盤をもたないかのである。しかし、ここまで考察が進められても、健康はやっぱりたいせつなものである、というわれわれの日常的な感覚は、少しもゆるがない。これはどう考えればいいのか。

それは、われわれの日常的な感覚での健康が、主に身体の病気や傷害に対立するもの、病気のときなどに憧れ求められるもの、というかなり即物的なものを意味しているからである。誰も、身体的、精神的、社会的に完全な状態としての健康を、日常生活のなかで思い描いたりしない。そのような健康は幻想にすぎないのだ、などと聞いても、ああそうですか、というくらいなもので、翌日かぜでもひけば、医者に行って薬をもらい、2、3日寝込んで回復すれば、やっぱり健康は重要だ、と思うというわけである。先の「身体的、精神的、社会的」は、健康の多面性、全体性ということであったが、現実的には、この三者はそれぞれ独立的である。身体的に不調をきたしていても、精神的、社会的にはうまく適応できる、また、他の場合もそれぞれ成り立ちうることから、それは理解されるであろう。そうすると、健康の重要性とかたいせつさというとき、それは、むしろ、けががなおる、病気がなおるというような、主に身体的なことさらに限定されるべきではないのか。社会性云々までも取り込んで、健康の全体性、究極性などということが、幻想の陥穽におちいることになることは、これまでの詳しい考察によって明らかであろう。たとえ文化という幻想によって生み出された病気であるにせよ、自動車は人間の脚力を衰えさせるのだから、自動車は明日から廃止しようなどという発想が無意味であるところまで来てしまった文化のなかの人間のために、その病気を予防したり克服したりすることに、医学は最大の貢献をすべきで、健康もそこにおいて語られるべきではないのか。田中が、至上の価値として健康を語りながら、「健康の価値、もしくは人の生命の価値<sup>30)</sup>」と思わず述べてしまうのも、病気や事故で失われる身体的な生命の保全が、健康の実質的な内容であるからであろう。

ここまで述べてくると、価値としての健康の位置はほぼ明らかであろう。それは、病気などから対置される、主に身体的なことさらに限定されるべきである。そして、そのような立場に立つとすれば、もはや健康の価値も限定的でしかない。「健康というものは、全ての人が望んでやまない目標であり、同時に自らの生活、生きることの充実と向上をはかる手段である<sup>31)</sup>」などとはもはやいえない。身体がくそしてそれにはもちろん精神もなんらかのかたちで関わっているのでは

るが)健康でなければ、仕事もなにもできないのであるから、健康は人間が生きていくうえでの基礎的条件である、生きることの充実と向上をはかる手段である、しかし、人が生きる目標ではない<sup>32)</sup>

補足的に説明を加えておくと、上で述べられたことは、田中がいう意味での、健康の手段視でも、古い精神主義的な健康観なのでもない。健康ということに実質的な意味をもたせようとするならば、生活の基礎的条件に関わることがが実際に最も重要である、というにすぎない。医者が、病気を回復した人がその後どのような人生を送るか、精神的に、社会的にどのような価値ある仕事をするかなどには関わらないように、生活の基礎的条件としての健康が、その基礎的条件を土台にして、手段にして、人が人生において何をなすべきかに関わる必要はないであろう。

人が、健康を土台にして、人生においてスポーツをしたらどうなるのか。健康についての長い思索を巡って、ようやくスポーツと健康について考える場に到達した。考察の手掛かりはすでにみえているであろう。

## 6 スポーツと健康

ポール・ワイスが、「スポーツ」のなかで健康について論じている<sup>33)</sup>彼の論は深い洞察に満ちたもので、たいへん示唆的ではあるが、彼がそこで「健康」によって意味するものは卓越した(excellent)状態というように、いま、われわれが限定的にとらえようとしている「健康」とは異なる。ワイスの論でも、スポーツと身体的な卓越性の関係が肯定的にとらえられているが、主に身体的なことさらに健康を限定すれば、スポーツと健康のむすびつきは明瞭ではないのか。健康でなければスポーツはできないが、逆にスポーツによってからだ丈夫になり、病気にもかかりにくくなる、というようなことは、われわれのしばしば経験するところであり、スポーツは健康を生み出すのであり、スポーツはまさに健康のためのものではないのか。このような意見は、よく耳にするものである。

まさかスポーツ=健康などと考えられることはないにしても、そうだとすると『スポーツマンの健康とは何か<sup>34)</sup>』という書物など同語反復で成立しえないはずであるが、しかし、かなり強烈にスポーツに健康の保持・増進が求められている。「健康問題とスポーツ」について、「スポーツは、たんなる一部の人の楽しみごとであったり、一部エリートの競技である時代は終るべきである。スポーツはすべての人達の『必要な活動』として自覚され、保障されなければならない



た<sup>35)</sup>」などと述べられるし、人々が社会人になって運動・スポーツをやり始めた理由の第一は「健康・体力の保持・増進」である、などという調査結果が報告される。<sup>36)</sup>

このような状況のなかで、単にこうあったら望ましいというようなことではなくて、スポーツと健康について考えるとすると、結局それは、スポーツとはなにかが問われていることになる。その場合、スポーツの本質が問題にされるだけではなく、まず、スポーツという語でなにを指示するのか、なにをスポーツとよぶのか、ということに注意しなければならない。

本稿では、先に示したように、機能的な教育としての「体育」に対して、ルールによって構成された独自の意味連関をもつ身体的活動という実体的なものとして、具体的にはバレーボール、サッカー等が「スポーツ」ととらえられている。ところで、上で示された調査の項目は、運動・スポーツであり、「運動」と「スポーツ」に若干の意味の違いがこめられているようであるが、調査での両語はあいまいに並置されている。スポーツで実際になされるのはスポーツ運動であるから、運動とスポーツを同じように考えても、この場合かまわないのではないか。そうではない。健康のための運動といった場合、それはスポーツ運動だけではなく、社交ダンスによって健康の保持・増進がもたらされた体験談を聞くことがある。また、そういった健康に役立つ運動を広くスポーツとよぶとすると、バスケットボールなどの、普通にスポーツ、あるいは競技スポーツといわれる独自の意味連関をもったスポーツ群の特性が問題にされえなくなってしまう。いずれにしても、「運動」と「スポーツ」を同値とすることは不適切である。このようにみてくると、生理学的に健康のための効果が指摘されたりするのは、まさに「運動」であって、スポーツは現実態としての「運動」によって健康に貢献しうるにすぎないということになるであろう。

このようなことは、当然といえば当然のことで、そのようなスポーツと健康の関係をふまえて、スポーツ科学の研究者は、スポーツと健康のむすびつきを述べているのかというと、どうもそうではない。そうではないから、最初に述べたようなスポーツと健康をめぐる疑問が生じるのであろう。運動生理学に携わる宮下が、科学者の立場からも、「スポーツは、そもそも遊びのためにするものであって、健康の維持・増進のためにスポーツを行うということは、真のスポーツではない<sup>37)</sup>」と述べていることは重要である。

ここでわれわれは、次のようにいわなければならないであろう。すなわち、スポーツは健康とは直接的に

は関係がない、と。この意味は、スポーツとよばれるものの構造の内部に、本質特性として、つまりそれによってスポーツの成立の基盤が与えられ、それがなければスポーツがスポーツとして成立しなくなるような必然的な条件として、健康があるのではない、ということである。スポーツは実体的なものとして、いろいろな関わりかたがなされるのであったが、スポーツを健康増進のために利用しようというのも、その一つの試みにすぎない。したがって、スポーツによって健康を害することがあるのは、いいか悪いかは別にして、少しも不思議ではない。しかし、現実的には、スポーツの価値として、健康阻害がいいのか悪いのかは問題であり、例えば、ミッチェナーはスポーツの意味を健康の増進に認めたいと述べるのである。<sup>38)</sup>それは、まさに一つの意味づけであり、この問題に関しては、スポーツの本質的な価値の解明が求められるが、一つだけいえば、スポーツが本質的には、日常生活の意味連関からは全く無意味の、人為的に設定された課題を解決するべくなされる行為である、ということには注意しておかなければならない。空腹を満たすためにものを食べることは、生物的な欲求にねざした直接的な意味があるが、スポーツにはそのような意味はない。仮に運動の欲求を満たすにしても、どうしてサッカーゴールという大きなカゴのなかにボールをけりこまなければならないのか、そこには、健康といったことはあまり関係ない、もっと違った何かがあると考えなければならないであろう。

スポーツは、健康に関しては、運動することによって、いわゆる体力が強められたり肥満に対処できたりして病気にかかりにくくなること、あるいは、ストレスを解消して気分を爽快にしてくれること、といったことがらに効果をもたらす可能性があるとしかいいない。それ以上のことを、「健康」という名のもとにスポーツに求めようとするならば、4節、5節で指摘された幻想としての健康の桎梏から逃れえない。さらにスポーツを健康に積極的に関係づけていく場合、次のような批判を、イデオロギーは抜きにして、受けとめなければならないであろう。すなわち、「現代社会におけるスポーツは、とりわけ社会心理学的な機能を果たす可能性を持っているため、まさにこの機能を支配のために一面的に利用することをねらって奨励されるのである。そのような利用を保障するには、議論の余地を許さないほどはっきりした正当性をスポーツに付与する必要がある。そして、その正当性を付与する作業の一つとして、スポーツの健康促進効果ということがあからさまに主張される。なぜなら、健康ということを持ち出せば、誰からもとやかに言われずに了承さ

れるからである<sup>39)</sup>。

さて、最後に、スポーツと健康の関係が論理的に整理され、両者の間に一線が画されるとしても、なお、スポーツに健康のイメージが付与されるということについての、De Wachterの論<sup>40)</sup>に簡単にふれておこう。De Wachterは、われわれの文明では、身体的健康が「競技者の身体」でしばしば表わされるが、それは、競技者の身体が単に(医学的に)健康だというだけでなく、社会的シンボルになっているからだという。そのような事態が生じるのは、健康という概念が環境とのバランスがとれた状態という静的なものではなくて、動的な、スポーツ的なイメージがそのまま健康のシンボルとなっていることと、健康が表現的な意味をもってきて、身体それ自体が差異化の体系となり、類似する身体に差異を持ち込み、アイデンティティを確保し、表現することの完全なイメージが競技者の身体となっていること、によるという。競技者の身体の賛美は、性のタブーと同じ機能を持ち、有限と自然を否定し、絶対的な健康、死の否定というユートピアの夢を描く。このユートピアは憧れの的となるが、それもわれわれが、それをユートピアだと理解するかぎりにおいてである。いまや、ユートピアを維持するためには、論理的基盤が必要であり、また競技者の身体は、もはや全体主義的な画一性のもとにあるというべきではないか。

このDe Wachterの論は、ある意味で、本稿におけるわれわれの考察を補足するものである。また、新たな問題への切り開きを含んでいる。それを開陳するには、しかし、新たなキャンパスが必要であろう。

## 7 まとめとして

関係の考察。(1)体育とスポーツの関係：体育は教育としての機能的なもので、スポーツはいろいろな関わりかたを可能にする実体的なものであり、体育はその機能、関係のなかに教材としてスポーツをとりこむ。(2)体育と健康の関係：体育は目標のなかに健康を内含しており、あるいはその可能性をもっており、体育と健康の関係は目標において必然的である。(3)スポーツと健康の関係：スポーツの構造のなかに健康は含まれず、スポーツは本質的には健康とは関係しない。身体運動を通じて、主に身体的な健康に貢献しうる可能性をもつだけのことである。

疑問について。a.健康についてどう考えればいいのか：一般に、身体的、精神的、社会的に完全に良好な状態と考えられるような健康は、相対的、制度的、観念的なものにすぎない。b.健康は人生の究極的な価値

なのか：健康はある意味で幻想にすぎず、究極的な価値なのかというような問い自体がそれだけでは意味をもたない。主に身体的なことがらについて、実際に生活に困難をもたらす病気や傷害の克服ということに健康の意味が限定されたとき、むしろ実質的な価値をもちうる。その場合、健康は人生の基礎的なことがらではあっても、目的とはなりえない。c.体育やスポーツと健康のむすびつき：上の(2)、(3)を参照。したがって、スポーツが健康を目指すようにはつくりされていないこと、スポーツによって健康を害する可能性があること、などは当然のことである。(それではなにがスポーツの価値なのかという問題は、重要であるが、本稿の範囲をはるかに越える別の問題である。)

以上が本稿の概要である。本稿の問題の背景は、De Wachterがいうような医学の哲学(philosophy of medicine)ともいべきものを含んでいるが、焦点は、むしろ、スポーツの本質究明を旨とするスポーツ哲学やスポーツ美学からながめられたスポーツにある。一見当然のように思われている健康の重要性、スポーツのそれへの貢献という図式に疑問を投げかけるのは、一つの戦略である。疑問の対象がほとんど疑う余地のないように思われているものであればあるほど、この疑問という方法が威力を発揮することは、いうまでもないであろう。

## 註

- 1) NHK放送世論調査所編『日本人の健康観』日本放送出版協会、1981、11頁。
- 2) 朝比奈一男・中川功哉『運動生理学』大修館、1969、1頁。
- 3) 拙稿『『体育』における美学的問題の意義』『広島大学教育学部紀要』第2部33号、1985、167-177頁参照。
- 4) この点に関しては、筑波大学の佐藤臣彦氏が卓抜な見解を示しておられる。佐藤臣彦「体育概念の哲学的基礎付け：序章—体育哲学方法論の探究—」『体育・スポーツ哲学研究』第6・7巻、1985、1-13頁、につづく一連の研究(未発表)がある。
- 5) このスポーツの特性についても一つの論の展開が必要とされるが、拙著「スポーツの美の哲学的考察」(学位論文)にもとづいている。
- 6) ここでいう「実体的」ということには注意しなければならない。ここでいう実体とは、いくつかのものをまとめ統一している土台をなし、それ自体である一定の構造を有しているものというような意味である。(アンリオ(佐藤訳)『遊び』白水社、1981、

- 37-38頁、も参照。) 教育の機能性に対応させてみた場合にそういえるのであって、スポーツも観点をかえれば、スポーツ実践者、施設、用具等によってつくり出される状況として、関係的なものである。(Loy, J. W. Jr., "The nature of sport: a definitional effort," Gerber, E. W. and Morgan, W. J. (Eds), *Sport and the body*, 2nd ed., Lea & Febiger: Philadelphia, 1979. pp. 38-47. 参照。)
- 7) 『改訂高等学校学習指導要領』, 1978, 47頁。付点は筆者。
- 8) 宮田尚之編『現代健康学』協同出版, 1970, 21頁  
宮田尚之『健康の研究』東山書房, 1979, 31頁。  
川村毅・菊地邦雄『現代健康論』大学教育社, 1979, 10, 13頁。なお、川村の論は宮田の論の転用である。
- 9) 篠田昭八郎ほか編著『現代社会と健康』文化書房博文社, 1984, 9頁。
- 10) 宮田(1970), 前掲, 66頁の引用文献参照。従来の健康観に対して、1946年のWHOの定義が現在では主流をしめている、そういう状況での従来 — 現在とでも理解すべきなのであろうか。田中恒男「健康法あれこれ — 現代養生訓批判 — 」『健康と生活』東大出版会, 1977, 9-11頁, にも同様の記述があり、かなり問題があるのではないか。
- 11) 宮田(1970), 前掲, 22頁。川村・菊地, 前掲, 13頁。なお、宮田の健康の「社会性」の理解は、明らかに田中によって批判されるところの誤解である。(田中恒男「人間生存と健康」『人間と健康』大修館, 1980, 27頁, 参照。)
- 12) 田中(1980), 前掲, 18-27頁。
- 13) 同書, 29-31頁。横橋五郎ほか『健康学概論』大修館, 1971, 23頁。
- 14) 田中(1980), 前掲, 13-18頁。
- 15) その極端な論が、宮田(1970, 1979)。しかし、田中の論にもそれは読みとれる。
- 16) 柄谷行人「病という意味」『日本近代文学の起源』講談社, 1980, 131頁。
- 17) 富永茂樹『健康論序説』河出書房新社, 1977, 120-121頁。
- 18) Bedworth, D. A., "Health education: a boon to humanity or a fantasy and fraud?" *Health Values: Achieving High Level Wellness*, 9(1), 1985, pp. 23-26.
- 19) 田中(1980), 前掲, 14頁。
- 20) 同書, 60-65頁。
- 21) 宮田(1970), 前掲, 30頁。原文には付点があるが、引用においては省略した。
- 22) 横橋, 前掲, 14頁。
- 23) デュボス(田多井吉之介訳)『健康という幻想』紀伊國屋, 1977, 23-24頁。
- 24) 富永, 前掲, 58頁。
- 25) デュボス, 前掲, 208-209頁。
- 26) 岸田秀『ものぐさ精神分析』, 『続ものぐさ精神分析』中公文庫, 1982。丸山圭三郎『文化のフェティシズム』勁草書房, 1984。参照。
- 27) 柄谷, 前掲, 131頁。引用文には句読点等に若干の修整を加えた。
- 28) 蓮實重彦「健康という名の幻想」『表層批評宣言』筑摩書房, 1979, 129-130頁。引用文には句読点等に若干の修整を加えた。
- 29) 田中(1980), 前掲, 65頁。
- 30) 同書, 63頁。
- 31) 大塚正八郎「現代の健康観」『体育の科学』第35巻第8号, 1985, 585頁。
- 32) 今道友信「健康への懐疑 — 知性の使命 — 」『健康と生活』東大出版会, 1977, 197-242頁, がこの問題に関してわかりやすく論じている。
- 33) Weiss, P., *Sport — A philosophic inquiry*. Southern Illinois University Press, 1969, pp. 86-99。(片岡暁夫訳『スポーツとはなにか』不昧堂 1985, 96-111頁。)
- 34) クレコフスキー編著(高橋華王訳)『スポーツマンの健康とは何か』ベースボール・マガジン社, 1979。
- 35) 近藤英男・高橋健夫ほか『改訂スポーツ新論』タイムス, 1983, 57頁。
- 36) 川村・菊地, 前掲, 14-15頁。
- 37) 宮下充正「スポーツと健康 — 運動不足の影響 — 」『健康と生活』東大出版会, 1977, 83-84頁。
- 38) ミッチェナー(宮川毅訳)『スポーツの危機』サイマル出版会, 1978, 103-136頁。また, 513-526頁も参照。
- 39) ベーメほか(唐木國彦訳)『後期資本主義社会のスポーツ』不昧堂, 1980, 161-162頁。
- 40) De Wachter, F., "The symbolism of the healthy body: a philosophical analysis of the sportive imagery of health," *Journal of the Philosophy of Sport*, Vol. 11, 1985, pp. 56-62.